

最優秀賞

ふれあい賞

その一言で

伊勢原市立伊勢原中学校

二年 長谷川 朋 世

『お手伝いしましょうか?』

「街中で立ち止まっている時、このたった一言で救われる方々があります。皆さん街で困っている人を見かけたら、ぜひ声を掛けて下さい。」

先日、私は静岡県富士宮市にある富士ハーネスという盲導犬訓練施設に行きました。私はここで、盲導犬ユーザーの方からこの話を聞いたのです。

正直なところ、今まで私は街で困っている人に声を掛ける事ができませんでした。理由の一つは、単純に私が自分から人に話し掛けるのが苦手だということ。もう一つは、他の誰かがきつと声を掛けてくれるだろう、というどこか他人任せな面が自分の中にあつたからです。

今回、私は富士ハーネスで盲導犬ユーザーの方にこんな事も教えて頂きました。

それは、目が見えない・見えにくい方が自分から誰かに助けを求めるとしても難しいという事です。

例えば、目が見えない・見えにくい方は街の「音」を目印に目的地へ向かうことがあります。そんな時困るのが、夏の時期だと蝉の鳴き声。どんなに街の音を記憶していてもあの鳴き声でかき消されてしまうそうです。また注意深く周りの音を聞いていても、静かに走るハイブリットカーの音は他の音に負けて聞こえなくなってしまう。

このように街中で困った時、周りの誰かに行き方を伝え、誘導してもらうことが一番良いのですが、声を掛けてもなかなか振り返ってくれない人がおらず困る事が多いそうです。私も、街で声を掛けられたとしても無意識に「自分のことではない」と都合の良い考えに逃げてしまっているような気がして、とても申し訳ない気持ちになりました。

些細な出来事でしたが、過去に自分も周りに助けを求められなくて困った経験があります。私がまだ小学生低学年だった頃、習い事に行くため初めて一人で電車の最寄駅まで行くバスに乗ることになりました。夕方のラッシュ時だったので、沢山の人が停留所に並んでいます。バスが到着して、いつも家族と一緒に乗る時と同じように、自分の番になったらICカードを機械に当てれば反応する、はずでしたが、何度やっても反応しないうままです。後ろに並んでいる人達の冷やかな視線、積み重なる焦り。誰かにどうするのか聞きたくても、なかなか口が開きません。やっと絞り出した言葉は、細々とした「すみません…。」

の一言だけでした。

結局、すぐ後ろに並んでいた女性の方が、困って動けなくなっていた私に声を掛けて下さり、カードケースの中に挟まっていた十円玉がカードと機械の通信の妨げになっていた事に気がつきました。その時私は、自分から周りの人に助けを求める事の難しさを知りました。

周りの人に自分から助けを求める事と、困っている人に声を掛ける事。この2つは、同じくらい難しいことなのではないでしょうか。

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて「バリアフリー」が求められているとの事です。建物など、ハード面でのバリアフリー化は以前より進みつつあります。しかし、どんなに整った設備があってもそれだけでは住みやすい街として不足している部分があるのです。

『お手伝いしましょうか?』

障がいを持つ人もそうでない人も、この一言で救われる事があるのではないのでしょうか。特別な設備にも最新の技能にも勝る人間の言葉。気軽な声掛けによって障壁が取り除かれる事もあるかもしれません。このような事が、心のバリアフリーの一つだと思えます。

二〇二〇年。十七歳になっている私は、他人任せにはせず、困っている方には自分から声を掛け、沢山の人の「救い」になれるような人になりたいです。